（別紙4）　　2021年度（令和3年度）

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	3471501282		
法人名	医療法人　社団常仁会		
事業所名	グループホーム沼南ひだまり		
所在地	広島県福山市水呑町3337－1		
自己評価作成日	令和3年11月14日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人 あしすと
所在地	広島県福山市平成台31-34
訪問調査日	令和3年12月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

認知症や身体機能の低下がある中で入居者の方に日々満足した生活を送ってもらえるよう、普段の会話などから得た情報や発言を基に、出来る限り希望を叶えたりしています。今年も新型コロナウイルスの影響で外出という希望には答える事が出来ていませんが、ひだまり内での食事で食べたい物をその都度相談し、メニュー決めから材料を切る、味付け、盛り付け等一連の流れを入居者個々に合わせて出来る所、出来ない所を見極めながら一緒に行うなど出来る時には行っています。またバーベキューなどを入居者とともに企画し楽しみながら過ごせるようにもしています。日中や夕食後に団欒の場を設け、入居者、ライフメイト（職員）と一緒にお茶を飲みながら冗談を言ったり、入居者同士助け合う、励ます等の場面も見られます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

事業所はその人らしさを大切に一人一人を尊重し、みんなで支えあって、笑顔あふれるやすらぎの家となるよう支援に取り組んでいる。利用者が主体となりいきいきとした生活が送れるように日常会話から思いや意向を把握し、それらを反映させている。食事作りはメニュー決めから後片付けまで職員と利用者が一緒に行い、利用者の出来る力を発揮できるようにその人に合わせた支援で役割ややりがいを引き出している。リビングで腕相撲や将棋を職員としたり、季節ごとの行事を大切にし、母の日や誕生日には花束をプレゼントするなど利用者の喜びや楽しみとなっている。利用者ごとに担当職員を決めて多職種と連携し、個別的で具体的な介護計画を作成し実践につなげている。法人内で「療養室・特養部門・グループホーム研究発表会」を開催し、職員育成に取り組んでいる。（電話にて聞き取り・書面調査）

Ｖ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）	○	1. ほぼ全ての利用者の
			2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
		○	4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
			3. たまに
		○	4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
			2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
		○	4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）		1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
		○	3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
		○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

特定非営利活動法人 あしすと

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入居者の方が地域でその人らしく暮らせるように、地域生活の継続を支えるための理念を掲げている。管理者や職員は、理念を確認できるよう事務所に掲示して見ている。ただ新型コロナウイルスの影響により今年度は地域に出て交流するなど実施できていない。	4項目の理念を事業所に掲げ、職員全体で共有している。管理者は理念に沿っているかを日々のケアの中で確認している。気付きがあればミーティングで提案し、職員間で意見を出し合い、実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスの影響今年度は地域に出ることが出来なかったので入居者と一緒に交流は出来ていない。ただごみ捨てなど職員だけで行く場合は挨拶をするなど地域との交流はしている。	法人として町内会に所属している。コロナ禍のため地域との交流は困難な状況にある。ゴミ捨てに行く際に地域の人と出会えば挨拶して交流している。	コロナ禍ではあるが、感染症の状況や法人の方針に応じて、地域との交流への取り組みが再開されることを期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	法人内に市からの委託事業である包括支援センターがあり、そこが役目をになっている。運営推進会議で認知症についてメンバーが困っていることがあれば、その都度アドバイスをしていたが、今年度は新型コロナウイルスの影響で運営推進会議が開催されていないので、アドバイスが出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	メンバーに参加を呼びかけ2か月に1回開催している。事業所の状況報告、取り組みやその状況を報告している。今年度は新型コロナウイルスの影響で開催できていない。	コロナ禍のため今年度は開催できていない。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	外部評価の提出の際に情報をわたしている。運営推進会議の開催が新型コロナウイルスの影響で出来ていないので、積極的には伝えられていないが、再開できるようになれば、市職員に連絡して伝えていくようにする。	市とは介護保険課への報告・相談・書類提出などを通じて連携している。市からの情報はメールで受け取り対応している。法人内に地域包括支援センターがあり、何かあれば相談事を行い協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	昨年度より職員の見える位置に介護指定における禁止の対象となる具体的な行為を書いた用紙を貼っている。また今年度はスピーチロックについての用紙を新たに作成し貼っている。玄関の施錠については20:00～8:30までとしており、日中は自由に出入り出来るようになっている。	身体拘束検討委員会を1～3ヶ月毎に法人内で開催し、職員にミーティングで情報共有している。11月には事業所内で「介護現場での3つのロック・スピーチロック」の動画研修から感想や意見を出し合い、職員の共通認識を図っている。また認知症の種類や要因を考慮しながら身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	認知症について勉強する事で入居者の中核症状やBPSDに対して理解し、職員がストレスを感じる事が減るのではないかと考えている。そのことで虐待につながらないのではないかと考えている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修等で権利擁護に関することについて学ぶ機会もある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	死亡が3件あり、家族・医師と充分話し合った上で退居している。また、病院入院中の退居が1名あり家族と話した上で退居している。		
10	（6）	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者の言動や態度からその人の思いを察する事とし、その人本位の生活が出来るよう運営に反映させている。また家族等へはひだまり訪問時や電話をした際に話をする中で、思いを聞いたり、意見や要望があれば、運営に反映させている。	利用者からは日常生活の中で、家族からは面会や電話で利用者の様子を伝え、意見や要望を聴いている。把握した要望から、食事メニューや面会などに対応し反映させている。家族から意見があればノートに記載し職員間で情報共有している。	
11	（7）	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティングや仕事終わりなどに職員より意見や提案を聞く機会があり、可能であればその都度反映させたり、ミーティングの場に出して皆で議論して反映できるものはさせている。	ミーティングや個人面談、仕事終わりなどに話をして意見を聴いている。掃除は日中に利用者と行い、夜間帯は個々の業務ができるように業務内容を変更し、職員の提案を受け入れて季節の行事を行うなど、反映に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	方針に沿った頑張ることを評価するシステムがあり、年一回の面接をしている。また、不満などがあれば、その都度聞き、改善できるようであればその都度改善し、働きやすい環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研究発表に参加してもらうなどしている。新人や中途採用者の方に対しては、法人内で活用している新人研修プログラムに沿って研修を受けてスキルアップを図って頂くようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人間では法人内研究などで交流する機会がある。外部の同業者の交流については新型コロナウイルスの影響で出来ていない。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談時や面接時に多くの情報が得られるよう家族・本人と話をするが初期より得られる情報は少ない。その為、入居後関わりを大切にし本人の生活を見ながら対応をしたり、そのことを家族に伝えてさらに情報を収集するなどして、さらに本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が困っている事、不安なことなどを聞き、家族の思いを知ること、そのことに対してどう取り組んでいくか話をして信頼関係を築くよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前面接や情報提供書を基に、必要としている支援を見極めるよう努めている。また本人や家族と話をすることで不安な事、困っている事を知り解消するよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の方は人生の先輩であり、共に過ごす事で多くの事を勉強させて頂いたり、教えてもらうなどし、職員は出来ない事や不安なことを支援する事で相互の関係が築けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時などにどうすれば入居者本人がその人らしく生活できるかを家族・職員で話をしながらともに支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今年は新型コロナウイルスの影響によりなじみの場所には行けていない。また面会がまだできないためなじみの人との交流もしていない。	馴染みの人間関係などは本人や家族から情報を得て把握している。家族の要望から面会について法人と検討し、窓越しで会話ができるように対応し関係継続の支援に努めている。個人の携帯電話で話をする人や年賀状を書く人もいる。1年間の利用者の行事などの写真を掲載したひだまり通信を発行し利用者の様子を家族に伝えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	おやつの時間や余暇の時間にみんなで集まりゆっくり過ごす時間（団欒の場）を設けている。入居者同士で一緒にテレビを見に行ったり、他の入居者の下膳をしてくれたりするなど入居者同士支えあう姿も見られている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居される時は、いつでもひだまりに来て頂いて良い事を伝えるようにしている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者と日々会話したり、その人の行動や表情を見る、または家族から情報を得て、一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めて検討している。困難な時は、家族と話をしながら、本人本位の立場で検討している。	お茶やご飯作りの時間など日々の関わりから思いや意向の把握に努めている。その人の状態に合わせて身振り手振りといった関わり方を工夫している。把握した情報はミーティングや記録を活用し職員間で共有している。お寿司が食べたいとの願望に対応して、利用者の満足感が得られるように支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に生活歴や暮らし方、生活環境を把握するが、入居後も本人から話を聞いたり、家族に本人の話を伝え、そこから新たな情報を収集するなどしてこれまでの暮らしの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活をライフチャートや日誌などに情報を記録し、職員同士で共有している。また、カンファレンスやミーティングにて現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月に1～2回のミーティングやカンファレンスにて本人や家族からの意向を踏まえたり、職員同士でアドバイスをするなどしてモニタリングを行い、現状に即した実行可能な介護計画を作成している。	入所時は暫定の介護計画を作成し、1ヶ月で見直している。利用者ごとに担当職員を決めて、医師や看護師、理学療法士にも相談し意見を参考にしている。カンファレンスやモニタリングを月1～2回、見直しは3ヶ月毎とし個別的で具体的な介護計画を作成し実践につなげている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ライフチャートや日誌などあらゆるものに日々の様子などを記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。その際入居者本位の計画を立てている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人のその時々に生まれるニーズに対応するため、法人内の他職種と連携して支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の高齢者の集いや近隣の老健で行われているちぎり絵（ぬり絵）に参加し活動することで、入居者の心身の力を発揮しながら暮らしを楽しむことが出来ると考えている。今年は新型コロナウイルスの影響で出来ていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居面接時や入居時に医療体制について説明し納得が得られている。他科受診についてはその都度家族と話をし希望を聞いて対応している。	入居時に事業所での対応を説明し、納得の得られているかかりつけ医となっている。夜間・緊急時は主治医に連絡し指示に従っている。他科受診は医師に相談し、家族の意向を踏まえた支援をしている。歯科は往診対応をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者との関わりの中で変化がある時はすぐに報告し、適切な受診や看護を受けられるように支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院した際に、本人の情報が分かるよう介護添書を渡している。今年は新型コロナウイルスの影響で面会にいけなかったが、入院時や電話にて情報収集するなどして早期退院に向けるようにした。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時や早い段階から、高齢のため、いつ何が起こるか分からない事、事業所で出来る事を説明したり、体調の変化があった時には今後の方針について家族と話し合いをしたりする。	入居時に事業所としてできる事・できない事を説明し、家族の希望があれば看取りの対応もしている。家族には利用者の状態をしっかりと伝え、家族の思いや悩みの把握に努めて、現状に即した対応を工夫している。また、医療従事者とも連携し、家族の要望に応じた支援に取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを作成し、訓練を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	運営推進会議に防災士の方に参加して頂いている。今年は運営推進委員会の開催が出来なかったので、地域の方と話をする機会がなかった。火災について起こった時にどうするかなどミーティングなどで伝えている。災害マップは事務所に貼っている。また年2回の避難訓練を行っている。	7月と11月に地震・夜間想定も含めた避難訓練を実施している。利用者と一緒に駐車場まで避難し、職員は水消火器を使用しての消火訓練も行った。職員は訓練の振り返りから今後の対策を検討している。備蓄は2日分確保できており、隣接する法人の協力体制も得られている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者は人生の先輩であることを常に意識し、一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねない言葉がけや対応に努めている。	接遇やプライバシーに関する研修が法人内で開催され、事業所内でもミーティングで話をしている。気付きがあれば職員間で声かけを行い、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応に努めている。トイレ誘導は羞恥心に配慮し、小声で行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者個々に合わせた対応をして、日常生活の中で思いや希望を聞いたり、表情からも読みとるようにして、自己決定が出来るよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日々何をしたいのかを会話の中から把握したり、何をしたらよいか出てこない時は本人の生活歴や趣味などから提供したりと入居者の状況・状態に合わせてその人らしい暮らしを提供できるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人の状況・状態に合わせて、その人らしい身だしなみやおしゃれを大切に支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者の出来る事・出来ない事を把握し、共有しながら、その人が出来る事を持っている力で発揮できるよう支援している。食事はメニュー決めから片付けまで個々に合わせて支援している。	利用者の出来る力を発揮する支援で、メニュー決め・味付け・後片付けを職員と一緒に行っている。事業所の畑で収穫したジャガイモなどの野菜を利用したり、おせちやお寿司などの行事食、たこ焼き作りなども利用者の楽しみとなっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べた量や使った食材、水分量などを記録して把握している。個々に応じて介助内容を変えるなどの支援もしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者個々の状態や能力に応じて口腔ケアを行っている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンやリズムを職員間で把握して、その人の状態・状況に合わせた対応をし、少しでも自立して排泄できるよう支援している。	排泄記録をもとにパターンやリズを把握している。トイレでの排泄を心がけ、その人に合わせた対応で日中ほとんどの人がトイレで排泄している。転倒骨折した人に対しても多職種と相談し、早期にトイレでの排泄が出来るように支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の予防として繊維物のある食材やきな粉などを食べてもらっている。水分量も把握し、少ない時はその人が好きな飲み物や甘みなどを工夫して飲んでもらい水分摂取が増えるよう努めている。それでも便秘する入居者に対しては、医師等と連携し、下剤の種類や量を見極め対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	その人の生活習慣や希望、タイミングに合わせてなるべく夕方から夜にかけて入浴できるよう支援しているが、状態や状況に合わせて変える場合もある。	できる限り本人の希望や生活習慣に合わせた時間で週1～2回入浴している。職員と1対1でゆっくりと話をしたり、1人で入浴したい人に対しては職員は脱衣所から見守り、ゆっくりと過ごしてもらうなど対応を工夫している。冬至の日にはゆず湯で季節感を工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の希望や状態に合わせて日中休んでもらっている。夜間はその人の入眠時間に合わせたり、横になりたいとの発言や表情、仕草から入眠して頂く支援をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	分からないものは医師や看護師に聞いたり、調べたりしている。また病院から頂く処方録をDrノートへはせてすぐに見れるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や趣味などを活かしたり、今その人がやりたいことを聞いたり、会話の中から見つけて支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出に行きたいと希望はされているが、新型コロナウイルスの影響で外出できていない。ただ外出できるようになったらどこに行きたいか、何をしたいかなど入居者の希望は聞いている。	日常的な職員とのゴミ捨てやワックスがけの前に同法人の施設に全員で外出することもあった。春には庭先の桜を見たり、車中から桜を見る機会もあった。10月には皆で串刺しを作り中庭でバーベキューを楽しんだ。今後外出が可能となればどこに行きたいかなどの話をして外出を楽しみにしている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の能力に合わせて財布を持ってもらい、本人が支払うことが出来るよう支援している。ただ新型コロナウイルスの影響で外出が出来ておらず使えるよう支援は出来ていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が電話を持っていれば自由にかけてもらっている。また電話を持っていない入居者に対しては、希望すれば家族に電話をかけるよう支援している。遠方の方に手紙を貰う事もあり、その際は誰から来たのかなど伝えるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	温度調節をすることで、暑さ、寒さに敏感な入居者の不快や混乱を防ぐように配慮している。生活感や季節感を出すために、室内に花を飾ったり、短時間窓を開けて季節を味わってもらう、庭の桜を見に行くなどの工夫をしている。	ホールの各所に家庭的なソファを配置し利用者は談笑や外気浴をしたり、一人になれる場所でくつろいだりと好きな場所で過ごしている。リビングに花を飾り、ひな人形や七夕飾りなどで季節の装飾を施している。また温度・湿度を管理して環境に配慮し利用者が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールのいろいろなところにソファーを置き、独りになれるような場所にしたり、また気の合った利用者同士で過ごせるようにしたりと工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前に家族に本人の馴染みのあるものや今まで使ってきたものを持ってくる必要性を伝え可能であれば入居時に持ってきて頂いたりして落ち着いて生活できるよう工夫している。	本人の使い慣れた家具や品々・思い出の写真が持ち込まれ、落ち着いて生活できるように工夫している。壁には職員手作りの作品と賞状などが飾られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	場所などが分からないと言われる入居者に対して、本人の見える位置や大きさに合わせて張り紙をしたり、会話のきっかけ作りになるものを張ったりと工夫している。		